

ホメロスの船団目録とその時代* ——メッセニアとアルゴリスからの考察——

安 永 信 二

I はじめに

ドラティの発掘

コリントス地方のドラティ（別名ダラニ）で、ミケーネ時代の居住地跡が発見された。調査にあたったマーチャンドは、この遺跡こそホメロスが『イリアス』の中でアガメムノンの支配する町として挙げたオルネイアイ（オルネアイ）であるとの確信をもって論文を発表したり。

ホメロスの『イリアス』はさまざまな関心と疑問をもって読まれ、「ホメロス問題」と呼ばれる一連の論争を引き起こしてきた。第二巻494行から400行近くにわたって列挙されているギリシアとトロヤの軍勢の一覧表（「船団目録」）もその一つである。そこにはミケーネの王アガメムノンを総大将とするギリシア軍を構成する町や地域がギリシア勢で170箇所以上、トロヤ王プリアモスに加勢すべくトロヤに馳せ参じた町30箇所近くが挙げられている。そして古典期あるいは現代でも、これらと同じ地名を冠する町が多く存在する。しかし船団目録でホメロスは、はたしてトロヤ戦争が起こったと考えられる時代（ミケーネ時代末期）の町や地域の名を忠実に再現しているのか、それともホメロスと同時代に存在した町か（前8世紀後半）、あるいはその二つの時代が混在する地理を描いているのかという問題はいまだに解決されていない²⁾。

オルネアイに関する古代の説明

ホメロスは、アガメムノンの領土をこう語る。

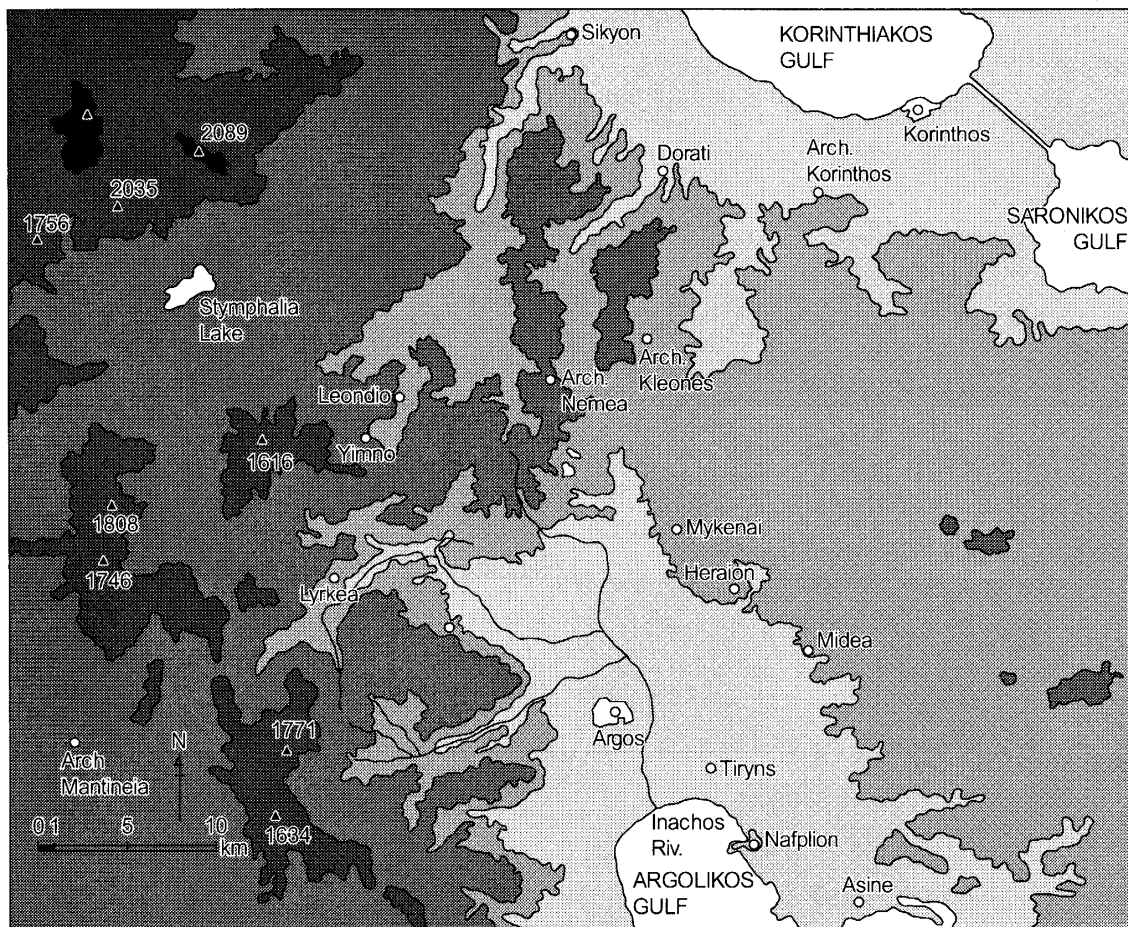
「みごとに築かれた町ミュケーナイ、
豊かに富めるコリントス、巧みに築かれたクレオーナイを保つ者ども、
オルネイアイと、いとおしきアライテュレエー、
アドレーストスが初代の王となったシキュオーンに住む者ども、
またヒュペレイエーや陰しきゴノエッサ、
ペルレーネーやアイギオンを領し、
アイギアロス一帯、広やかなるヘリケーあたりに住まう者ども。

百艘の船に乗るこの者たちを率いるのはアガメムノーン、
アトレウスの子なり。』³⁾

これらの中で現在ほぼ確実にその位置と地名とを比定できる地を見れば、コリントス(コリント)、シキュオン、アイギオン(エギオン)などの主要な地はコリント湾沿いに点在しており、王国の中心たるミケーネがアルゴスに近い内陸にあることがわかる。このため、オルネアイがコリント湾岸とミケーネを結ぶ地域の中にあったことは間違いない。しかしその位置について、すでに古代の史家や旅行家たちのあいだでも場所に関する記述は曖昧であり、現代の研究者たちも特定できないままにきた。

紀元後2世紀の旅行家パウサニアスは、アルゴス市のデイラス門を出てマンティネア方向へ60スタディオ(約11Km)の地点にリュルケイア、オルネアイはリュルケイアからさらに60スタディオ行ったところにあると記している⁴⁾。一方彼よりも一世紀以上前のストラボンがオルネアイがアルゴス領にあったとしながらも、その位置はコリントとシキュオンの間にあったと記述した⁵⁾。

【地図1 コリントスとアルゴス平野】



パウサニアスのオルネアイが、ほぼ彼の言う場所に前5世紀に存在したことは事実である。ペロポネソス戦争の後半(前418年)スパルタがテゲアに侵攻した際、アルゴス軍がマンティネア、アルカディア、クレオナイ、アテナイ、そしてオルネアイとともにこれを迎え討ったこと、またアルゴス内の親スパルタ派をオルネアイに移住させアルゴスとオルネアイとの間に相互不可侵条約を締結したが、2年後にはアルゴス軍がオルネアイの町を跡形もなく破壊したことをツキュディデスが記録しており⁶⁾、アルゴスとオルネアイが互いに近接していたと思われるからである。しかしアルゴス西部の山間部を中心にフィールドワークを試みてきた20世紀の研究者たちは、前5世紀のオルネアイと目される地の近辺にミケーネ時代あるいはホメロスの時代の遺跡をついに発見することができないままに終わった⁷⁾。それゆえ前5世紀のオルネアイをもって、船団目録のオルネアイだと断言することはきわめて困難だと言わざるを得ない。

新たなるホメロス問題

このような状況の中で発見されたドラティ遺跡は、ストラボンが示すオルネアイと一致する場所にあり、船団目録が呈する疑問を解決する大きな手がかりとして期待される。

しかし、もしここが船団目録に記されたオルネアイだという確かな証拠が発見されれば、ホメロス問題は新たな転機を迎えることになる。時代背景に関するホメロス問題が論争的となつてからのこの半世紀あまりの間に、貴重な手がかりとなる発見が相ついだにもかかわらず、依然として明快な答えを得るに至っていない⁸⁾。研究者たちの間では、青銅器時代末期の描写であるということに対して否定的な見解でまとまりつつあるが、いまなお完全に捨て去ることができないままにいる。ドラティとオルネアイとが一致すれば、学界の趨勢はふたたび『イリアス』の背景を青銅器時代に求める方向に傾くかも知れない。だが、ドラティがオルネアイだと確定したにしても、ただちにホメロス問題が解決するわけではないことは確かである。

そこで本論では、船団目録に関するホメロス問題を検討する第一段階として、線文字B文書の解読とフィールドワークによって青銅器時代とその後の様子が明らかになったメッセニアと、考古学調査が進んでいるアルゴリスをとりあげて、基本的な問題を整理することとしたい。

II ネストールの王国

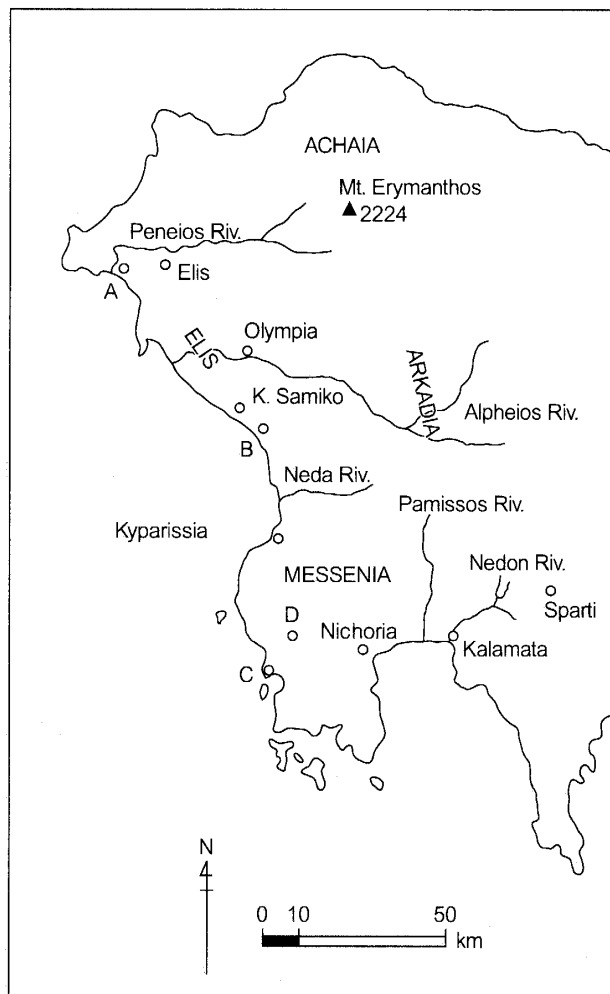
二つのピュロス

ピュロスについては、すでにストラボンが疑問を抱き、詳細な検討をおこなっていた。彼の時代にはピュロスという名の町がペロポネソス半島西部に3箇所存在し、それぞれの町の住民が自分たちの町こそネストールの王宮があったピュロスだと主張していたからである(エリス市近くのピュロス【地図2：A】、トリピュリアのピュロス【同：B】、メッセニアのピュロス【同：C】)⁹⁾。実際、ホメロスの地理描写からピュロスの位置を特定することは不可能である。若き日のネストールがエペイオイ族と戦ったというホメロスのくだりは、要約するとつぎのようになる。

「ピュロスのはずれにあるアルペイオス河畔のトリュオエッサをエペイオイ族が取り囲んだため、ピュロスの騎兵はアレーネー近くで海に注ぐミニュエーイオス川に集結し、歩兵が来るのを待っていた。夜明けとともに進軍したピュロス勢は真昼ころにアルペイオス川に到着し、翌日戦いの火蓋が切られた。敵将ムーリオスを討ち取ったネストールの働きで、ピュロス勢はブープラシオン、オーレニエー、アレイシオンまで進撃し、(おそらく同日のうちに)ピュロスまで引き返してきた。」¹⁰⁾

ここに登場する6つの場所と2本の川のうち、アルペイオスはオリンピアを流れる川の名として現在も残っている。前述した通り名称が変更された可能性はあるものの、エリス王アマリュンケウスがブープラシオンに葬られたとの記述から察するに¹¹⁾、ブープラシオン・オーレニエー・アレイシオンはエリス地方に、またアルペイオス川は現在のそれと同じ川を指しているものと考えて良い。この場合ピュロスは、アルペイオス川から半日行程の距離に

【地図2 ペロポネソス半島西部】



ある川（ミニユエーイオス川）をさらに南下した地点、同時にエリス地方からその日のうちに戻って来られる場所に設定されている。アルペイオス河畔からメッセニアのピュロスまでは160キロ以上あり、戦闘があったその日のうちに帰り着くことは不可能である。この位置はストラボンが挙げる3つのピュロスのうち、トリピュリア地方のピュロス（現カコヴァトス）とほぼ一致する¹²⁾。

ところが『オデュッセイア』で説明されるピュロスの位置はこれとは異なる。オデュッセウスの子テレマコスが父の消息を尋ねるべくピュロスへ渡り、スパルタのメネラオスを訪ねた後に故郷イタカへ船で戻った。このときの行程は、ピュロスを戦車に乗って出発し、ペライで一泊して翌日にスパルタに到着¹³⁾、またイタカへはペアイの港に立ち寄った後エリス沖に達した¹⁴⁾と記されている。ペライは現在のカラマタではないかと推測されており¹⁵⁾、トリピュリアのピュロスではカラマタまで到達するのに一日行程では困難であり、またエリス沖に達するのに途中でどこかに寄港する必要もない。トリピュリアのピュロスでは距離が合わないのである。このケースでは、ストラボンが三番目に挙げたメッセニアのピュロスがあてはまる。

このように、ある程度距離を推し測ることのできる部分を取り出してみると、2箇所目のピュロスが浮かび上がってくることがわかる。ネストールのピュロスが一箇所であることは言うまでもないが、そのピュロスがどちらなのかという問題はさておき、ホメロスはネストールの武勇譚を語るときにはトリピュリアの、またテレマコスの行動ではメッセニアのピュロスを考えていたことは疑いない。しかしおそらく、ホメロスは自分の頭の中に、両ピュロスと同じ場所として存在させていたであろう。つまり彼自身は、ピュロスの位置をペロポネソス半島の西岸だと大まかに捉え、地理的な矛盾を感じることなく、ネストールの王宮をエリスに近くカラマタにも一日で行ける場所だと考えていたのである。

ネストールの王国に対するホメロスの地理理解

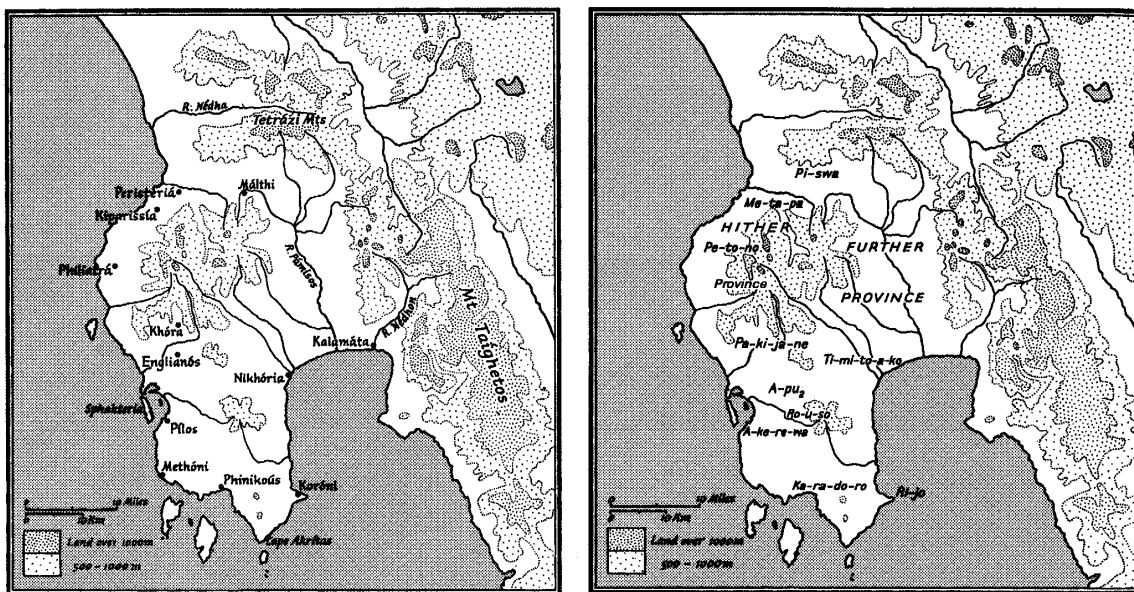
一方、ホメロスが伝えるネストールの支配領域内にある町は、ピュロスを中心にアレネー、トリュオン(トリュオエッサ)、アイピュ、キュパリッセーイス、アンピゲネイア、プテレオス、ヘロス、ドーリオンの9箇所である。それぞれが現在のどこかという検討は後にゆずるとして、まずはホメロスが王国の版図をどのように考えていたのかを理解する必要があるだろう。アガ멤ノンがアキレウスと和解すべく、自分の娘の一人を彼に嫁がせ、その持参金として、カルダミュレー、エノペー、ヒーレー、ペーライ(ペライ)、アンテイア、アイペイア、ペーダソス7つの町を与えることを公言した。これらは「すべてが海に近く、砂浜続くピュロスと境を接するところ」にある

とホメロスは説明する¹⁶⁾。アガ멤ノンの王国はミケーネからコリント湾沿岸にかけての地域であったが、メッセニアとトリピュリアのピュロスの北にはエペイオイ族の住むエリス地方があるため、もっとも近い沿岸部はスパルタと接する東の地域（メッセニア湾）を想定しての説明かと思われる。しかしメッセニア湾は、コリント湾あるいはミケーネからかなり離れた地域であり、アガ멤ノンの領域であるとしたら、飛び地領土であった。あるいはホメロスの地理理解では、メッセニア湾はコリント湾に近い地域だったのかも知れない。エリスのピュロスと想定しての表現であればコリント湾沿いの地域となりアガ멤ノンの領域に近くなるのだが、これを主張する研究者はいない¹⁷⁾。

またピュロス王国は、アルカディアとも境を接していた。ホメロスは、若き日のネストールがイアルダノス川近くのペイアでアルカディア勢と戦い、敵将エレウタリオンを倒したことを第七巻で語っているのだが¹⁸⁾、ペイアは船団目録にはなく、イアルダノス川も現在はもちろん古典期にもその名は存在しなかった。アルカディアに近い山岳地帯もしくはメッセネ平野のはずれとも思われるが、定かではない。

ホメロスに描かれたピュロス王国の版図を地図に落とすのは、以上のようにきわめて困難である。しかし、ホメロス自身はしばしば「砂浜続くピュロス」と表現している。テレマコスがネストールを訪れたとき、ピュロスの民が犠牲を捧げるべく集っていたのも海岸であった。漠然とではあるにしても、ホメロスはメッセニアからエリスにかけての海岸地帯を中心にネストールの王国を想定していたものと推測される。

【地図3・4 ピュロス王国】



after Chadwick (1975) Maps21, 26

線文字B文書のピュロス王国

だが、ブレゲンによって発見されたネストールの王宮と、ヴェントリスが解読した線文字B文書により、ホメロスの地理理解は実際とは大きく異なっていることが判明した。王宮はストラボンが言ういずれのピュロスでもないところにあり、またピュロス王国の版図もホメロスが頭に浮かべていたものとはかなりずれていたのである。

現ホーラ村から4キロほど南に下った寒村アノ＝エングリアノスで発見された王宮跡から大量の線文字B文書が出土し、この地がPu-roと呼ばれていた地区であることが明らかとなったため、ここがネストールの王宮すなわちピュロス王国の首都であることが確実となった【地図2：D】。だがここは、砂浜が続くどころか現在の海岸線から6キロも内陸に入ったところにあり、ホメロスの枕詞が王宮の立地条件を正確に形容したものではないことがわかった。しかも、ここを中心として王国がどのような領域を有していたのかを、B文書から正確に読み取ることも困難なのである。

それでも、王国が二つに区切られていたことを示す文書が発見された。On300番に刻まれたpe-ra-a-ko-ra-i-joは、欠損しているがこの粘土板の1行目に刻まれていたと思われるde-we-ro-ai-ko-ra-i-jaという語と対になっていたものと推測されている。これら二つの語は、akoraijo (aikoraija) という単語に古典語のpera (こちら)、deuro (向こう) の接頭辞がついたものである。したがってakoraijoのこちら側と向こう側の地域を指しており、この語がAigaleonへの音韻変化の許容範囲内にあることから、ピュロスの北東にあるアイガレオン山系がその境であることはほぼ間違いない¹⁹⁾。

「こちら側」には、少なくとも9つの地区があったことが確認されている。神々への奉納のため牛とブタの飼育を命じたと解される文書(Cn02)とその他の2枚の粘土板には、Pi-swa, Me-ta-pa, Pe-to-no, Pa-ki-ja-ne, A-pu₂, A-ke-re-wa, E-ra-to (Ro-u-so), Ka-ra-do-ro, Ri-joという9つの町がまったく同じ順番で記載されていた。これらは「こちら側の地方」に北から順に記載されていると考えられ、その最北の地と思われるPi-swaは、現在のネダ川よりも南に位置していたとチャドウィックは解釈している²⁰⁾。

B文書に登場する地名のいくつかは「船団目録」にも登場しているのだが、その命名法は位置の確認をさらに困難なものとしている。アイピュと目されるA-pu₂は「急勾配の」、同じくへロス(e-re-e)は「沼」、キュパリッセーイス([ku]-pa-ri-so)は「糸杉」、上記のCn02文書に記されたKa-ra-do-roは「峡谷」、Ri-joは「岬、頂上」というふうに、地形をあらわす語がそのままつけられているからである。このため、それぞれの地区がどの辺りであったのかについては、ほとんど推測の域を出ないままにいる。

一方アイガレオン山系よりも「向こう側」には、(a)Ra-wa-ra-ta₂, (b)E-sa-re-wi-ja,

Za-ma-e-wi-ja, (c)A-sja-ta₂, Sa-ma-ra, Ti-mi-to-a-ko, (d)E-ra-te-re-we, A-te-re-wi-jaの4群8地区が含まれており、この地区はパミス川とマヴロズーメノス川および東西に走る丘陵と低地の境目で地理的に4つに区分され、(c)と(d)のグループはピュロス寄り、(a)と(b)の3地区は東側に位置していたとする論が出されている²¹⁾。これらの地がそれぞれ後のどこに比定できるかはいまだに解明されていないものの、標高2000m級の山並みが続くタイゲトス山系を越える地域を支配下に置いていたとは思われず、ne-do-wo-ta-deの地名が別の粘土板に出てくることから、王国の東端は河口にカラマタがあるネドン川流域までと考えてよかろう²²⁾。

ホメロスとの比較

B文書からは以上のように、ピュロス王国の北限をネダ川、また東端はネゾン川流域のメッセネ平野までと漠然とながら推測することができた。エリスからメッセニアにかけての海岸地帯に長く伸びるホメロスの王国とは、地理的に大きなズレがあることがわかる。ところが上述した通り、地名はいくつかが一致していた。「こちら側の地方」の一つA-pu₂はアイピュ、[ku] -pa-ri-saはキパリッセイエース、e-re-eはヘロスを、また別の粘土板に刻まれたa-pi-ke-ne-aはアンピゲネイアを想起させる。

これらの中で、現在のキパリッシアはネダ川よりも南に位置し、ホメロスのキパリッセイエースと同じ場所であるとの期待を抱かせるかも知れない。しかしトリピュリアのピュロスがネストールのピュロスだと判断したストラボンは、ネダ川の北と南の2箇所同名の町があったことを伝えており、メッセニアのキパリッシアはホメロスのそれとは異なるものだと考えていた²³⁾。またアレーネーはネストールの武勇譚でも出てきた場所であるが、ストラボン・パウサニアスともに後のサミコンだと述べ、ここ(現カト=サミコ近く)から青銅器時代の居住地跡が発見されていることから、アレーネーであると認める研究者も少なくない²⁴⁾。しかしカト=サミコはネダ川よりもずっと北のアルペイオス川に近いところ、つまりB文書が示す王国の領域外にあり、もしここがアレーネーであるとするならば、ホメロスはB文書のものではなく、違う時代の様子を描いていたことになる。

さらに現カラマタがペライと推測されていることを上に述べたが、その根拠はアガメムノンが申し出た地域がメッセニア湾岸でしかありえないというホメロスの地理描写から得られる消去法と、カラマタから青銅器時代の遺跡が出土したという二点である²⁵⁾。しかし、B文書の解読は、カラマタまでをピュロス王国の版図に含むことを容認するものであった。このため、アキレウスのために申し出た7つの町すべてがメッセニア湾岸沿いにあるとする考えは排除されることになる。

このようにホメロスが語るピュロスの位置は一つではなく、アレーネーは王国の外、アガ멤ノンの所領であるペライは逆に王国内にあることがわかった。この事実は、ホメロスの描く世界がミケーネ時代のそれではなかったのではないかという結論に、われわれを導くであろう。

それでは、ホメロスはいかなる材料に依拠して地名を考えついたのであろうか。

この疑問を解く手がかりは、実はB文書そのものにある。

線文字B文書に刻まれた地名

ピュロスで発見された線文字Bの粘土板文書には、少なくとも160以上の地名が記され、王国内部には240前後の村落があったと推測されている。上述したように、ホメロスに登場するキパリッセーイス、アイピュ、ヘロス、アンピゲネイア、そしてピュロス。またネドンやアイガレオンなど、川や山の名も見られた。このほか、オデュッセウスの支配下にあったザキュントス (za-ku-si-jo)、アイトロイたちの住むプレウロン (pe-re-u-ro-no-de)、メッセニアとエリスの間に位置するレプレオン (re-pe-u-ri-jo)、エリス地方のエリマントス山 (o-ru-ma-to) やオリンピア (u-ru-pi-ja-jo)、コリントス (ko-ri-to)、トロヤ勢に味方した町として挙げられているアドレステイア (a-da-ra-te-ja)、あるいはまた、キュテラ (ku-te-ra₃)、メロス (ma-ro) などの島々を指すと思われる地名が記されていた²⁶。ミケーネ時代には、すでにホメロスが挙げた地名はかなり存在していたのである。残る150箇所前後の地名のうち大多数は忘れ去られ二度と復活することはなかったが、いくつかは後代までその名が残り、またいくつかはかろうじてホメロスの時代まで語り継がれていた。ホメロスは生き残っていたこれらの地名を使って、擬古的な色合いを強めたのではないだろうか。

ホメロスが使った材料に関する疑問は線文字B文書によって解決できるのだが、ここで地名と場所の不一致というつぎなる疑問が生じる。だがこれも、考古学調査の結果からある程度推測することが可能なのである。

居住の連続性とホメロスの地名

線文字Bの解読により青銅器時代からの民族的連続性は立証されたが、ミケーネ文明崩壊以後、人々の居住分布が大きく変化したことが考古学調査によって明らかにされつつある。ブレゲンのピュロス王宮発見後、エリスとメッセニアでは数々の発掘調査が試みられ、20世紀後半に入ると、ミネソタ大学による調査隊 (UMME) がメッセニア湾北西沿岸から2キロ余り内陸に入ったニコリア (カルポフォラ) を重点的に発掘し²⁷、1990年代にはテキサス大学等を中心とするフィールドワークグループ

(PRAP) がメッセニア地方全域にわたる地表調査を実施してきた²⁸⁾。

ギリシア全域を見れば、ほとんどすべての王宮は崩壊あるいは炎上して放棄され、それまで人々が密集していた町の人口も激減した。言うまでもなく、王宮を中心とする行政機構は壊滅し、文字も使用されなくなった。しかしすべてが一様な被害を蒙ったわけではなく、地域によって微妙な差異があったことが認められている。そしてUMMEやPRAPの調査により、メッセニアを含むペロポネソス半島西部はとくにその変化が顕著であったことがあらためてはっきりとされた。

さてクレタとキクラデス諸島を除くギリシア本土の青銅器時代は、EH (Early Helladic), MH (Middle Helladic), LH (Late Helladic) の3期に分類され、それぞれがI～III期、そして一部はさらに細分化されている。ミケーネ時代の盛期はLHIII Bに当たり、その年代は前1300年から前1200年前後までである。文明の崩壊はIII B末期に生じ、III Cは衰退と混乱の時期、SM (Sub Mycenaean) はわずかにミケーネ時代の名残が見られた時期で、前1050年前後まで。その後は土器の模様に新しい技法(幾何学文様)が採り入れられはじめたため、前700年ごろまではジオメトリック期(Geometric: これらもProto, Early, Middle, Lateと分類される)と呼ばれる時代となる。

ピュロス王宮(アノ＝エングリアノス)はIII B末期に炎上し、III C期には人の居住がわずかに見られるものの、その後はほとんど人の居住は認められなくなる。また現在のキパリッシアからわずかに内陸に入ったムリアタダ村にはかなり大きな城砦とメガロンそれにトロス墓(これらは王宮と王族の墓の象徴的存在: ピュロスの王族の居住地と推定される)が出土しているが、ここもIII B末期に崩壊した。ムリアタダから東に22キロ(直線距離では11キロ強)のところにあるマルティでは王宮崩壊後もPG期(原幾何学文様期)まで人の居住があったが、町が破壊されてその後二度と人が居住することはなかった²⁹⁾。

一方ニコリアで1960年代から73年にかけてUMMEが発掘をおこない、LHIII期から前8世紀後半まで居住の連続性がある可能性が高いという結果を得た³⁰⁾。それでもこの時期に作られた土器は装飾や模様のない粗製土器がほとんどを占め、前9世紀にラコニアや西ギリシアと交流を示す痕跡はあるが、前8世紀終わりごろにはふたたび集落が放棄されたことが明らかにされた³¹⁾。なお、ニコリアが王国の何と呼ばれた地区であるかを示すB文書は発見されなかったが、「向こう側」のTi-mi-to-a-koではないかと考えられている。同様にエリス地方でも、III B期からPG期にかけての連続性が期待できる遺跡はないに等しい。このようにペロポネソス半島の西半分は、ミケーネ文明が崩壊してからごく一部の地域をのぞいて無人に近い状態が続いていたのである。

王国が崩壊した後、おそらく多くの人間が他の地域に逃れた。ヘロドトスは、アテ

ネの僭主ペイストラトスの一族がピュロスのネレウス（ネストールの父）にまでさかのぼり、アテネの伝説的な王メラントスやその子コドロスも同族の出であることを伝えている。真偽のほどは定かではないが、あながち架空の伝説であるとも断じがたい。むしろ、ピュロス王国の崩壊とともに流出した人々がいかに多かったかを示す伝承であると受けとめることができるであろう³²⁾。

地名も同様の運命をたどったものと思われる。チャドウィックはペロポネソス半島内の遠く離れた地で線文字B文書の地名が見られるのは、ピュロス王国崩壊後の混乱した時代にメッセニアを捨てて移住した者たちがもたらしたためかも知れないとしているが³³⁾、王国内部の地名にもこれはあてはまる。アイピュ、ヘロス、アンピゲネイアは、その名のみが残り、ホメロスにまで伝わったのであろう。一方、レプレオン、プレウロン、オリンピア、エリマントス山、アイガレオン山、ネドン川は、本来の地名と別の場所である可能性を否定することはできないが、ミケーネ時代から変わらず残っていたことも十分に考えられる。

そしてピュロスは王国の都であったがゆえに、後世までずっと語り継がれたことは疑いのないことである。しかし、その正確な場所がわからなくなり、ホメロスの叙事詩（あるいはその一部を構成した英雄譚）が人々の間に広まるにつれて、ピュロスを名乗るところが複数箇所出てきたのではあるまいか。ネストールの武勇談がいかなる事実をもとに作られたのかは知る由もないが、ホメロスのペロポネソス半島西部に関する地理描写に矛盾が見られるのは、このようなメッセニアの特殊事情が原因かと推察される。

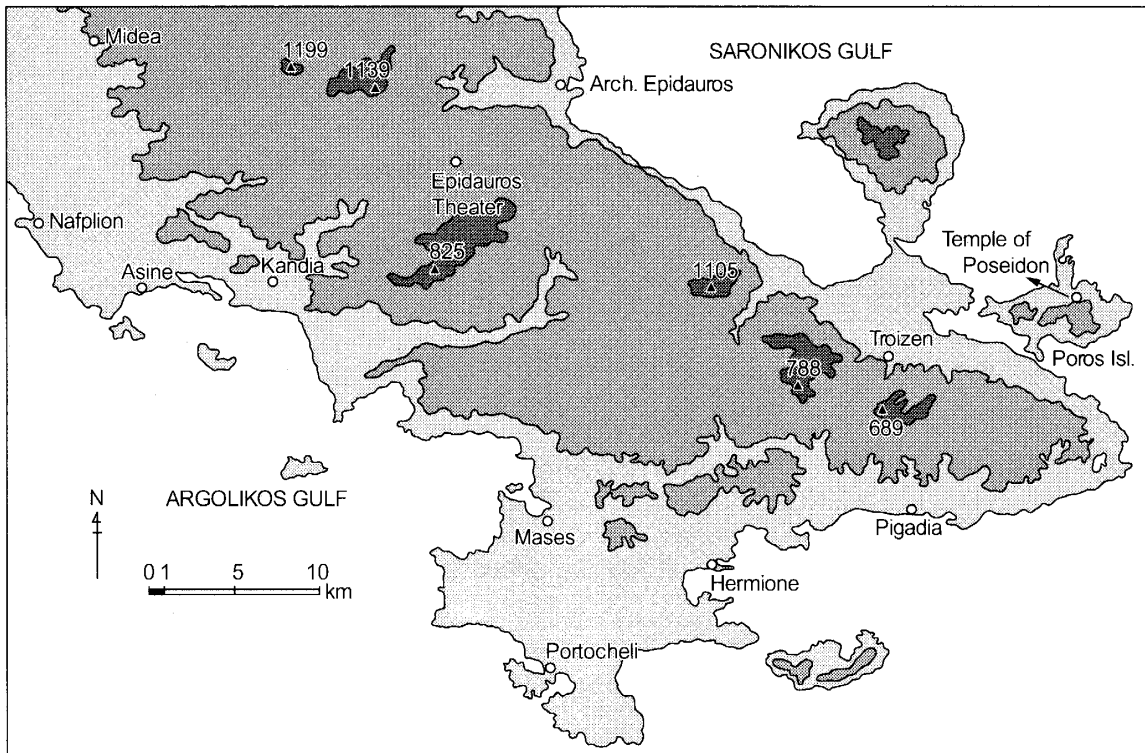
Ⅲ アルゴリス

アルゴリスにおける居住の連続性

ホメロスが挙げる地名の問題が、ミケーネ社会崩壊後の居住の連続性と関わりがあると述べたが、今度は同じ視点からアルゴリスを見ることにしてみよう。

アルゴリスの鉄器時代初期については、フォーリーの研究と1979年から進められたスタンフォード大学を中心とするジェイムソン、ランネルズ、ファン＝アンデルらの南アルゴリスのフィールドワーク（the Argolid Exploration Project）が大いに有効である。フォーリーはジオメトリック期におけるアルゴリス全域のこれまでの考古学調査を整理し、ポリス成立期の諸相を概観した³⁴⁾。またAEPのフィールドワークは、メッセニアのPRAPと同じく地表調査のため一地点の詳細な分析という点では発掘調査に遅れをとるものの、東南アルゴリスの大部分をカバーしており、概容を理解するうえ

【地図5 アルゴリス東部海岸域】



で重要な調査である³⁵⁾。

フォーリーのまとめによれば、居住の連続性が確認できるのは6箇所であった。LHIII B期における居住地が48を数えたことを考えれば、ここでも極端な人口の減少があった。しかしミケーネ社会の崩壊により荒廃が著しかったのは東部海岸域であり、この地域ではIII C期までは居住の痕跡がいくつか残っているが、SM期（亜ミケーネ期）になるとほぼ完全に消滅している。一方、アルゴス平野近くのミケーネ、アルゴス、ティリンス、アシーネ、ナウプリア、デンドラでは途絶えることなく人が居住していた³⁶⁾。中でも興味をひくのはティリンスで、ここでもIII B末期に宮殿は崩壊したが、むしろ続くIII C期の時代になってから集落の面積が増大しているのである³⁷⁾。PG期にはアルゴス平野近辺ではアシーネのみが人口が増加し、東部海岸域ではピガディア³⁸⁾とポルト＝ヘリ（ハリエイヌ）³⁹⁾に人が戻ってきた形跡がわずかに見られるにすぎない。続くEGとMG期（初期・中期ジオメトリック期）における人口と集落の数は微増程度であったが、前8世紀のLG期（後期ジオメトリック期）になるとアルゴスでは人口が爆発的に増加し、東部海岸域でもトロイゼンのポセイドン神域、カンディアなど18箇所で見つかった居住地が発見され、このうち12箇所（あるいは11箇所）は新たに作られた集落であった⁴⁰⁾。

さてホメロスが挙げるディオメーデース（アルゴリス）の船団は、アルゴス、ティリンス、ヘルミオネ、アシーネ、トロイゼン、エイオナイ、エピダウロス、アイギナ、

マセースの9箇所から構成されている。このうち東部海岸域の町はヘルミオネ、トロイゼン、エイオナイ、エピダウロス、マセースの5箇所【地図5】。エイオナイはピガディアであるとの指摘はされているが⁴¹⁾、明確な位置確認はできておらず、その他の4つは青銅器時代からの連続性が認められないため、これらの町が同じ名前で同じ場所にあったかどうかはまったくわからない。

東部アルゴリスの伝承

東部アルゴリスには多くの神話や伝承が残されていた。とくに詳しく述べているのがヘロドトスとパウサニアスである。

アテネの英雄テセウスの母イトラーの出身地として有名なトロイゼンについて、パウサニアスは、ヘラクレイダイの帰還に際してアルゴスのドーリス人を同居住民として受容したこと、この町から小アジアのハリカルナソスやミュンドスあるいはアッティカに移住したことを書き記している⁴²⁾。ドーリス人を受容したのは、トロイゼン以外にもヘルミオネとエピダウロスに共通する伝承であった⁴³⁾。

ヘロドトスによれば、エーゲ海東部に移住したのはトロイゼンだけでなく、エピダウロスもそうであったらしい。前480年のサラミスの海戦時、ペルシア軍の武将として参戦した唯一の女性アルテミシアはハリカルナソス・コス・ニシロス・カリムノスの艦隊5隻を率いていたが、ハリカルナソス以外の町（島）の住民はエピダウロスから移民したドーリス人であったとしている⁴⁴⁾。このエピダウロスは、凶作に悩まされていたときデルフォイに神託を伺い、当時世界中でアテナイにしか植生してなかったというオリーブの樹を一本伐採して二柱の豊穡の女神像を造って奉安した⁴⁵⁾。ヘロドトスはまた、ヘルミオネとアシーネがドリュオペス人であったことも伝えており⁴⁶⁾、ドリュオペス人は海賊行為を働く民族であったとの伝承もある⁴⁷⁾。

東部アルゴリスには、カラウレイア同盟なるものが組織されていた。トロイゼン市の港ポゴンの前方にあるカラウレイア島（現ポロス）にはポセイドンの神域があり、この神域をめぐるデルポイと同じく隣保同盟が結成され、初期にはヘルミオネ・エピダウロス・アイギナ・アテナイ・プラシアイ・ナウプリア・オルコメノスの7市が加盟していたとストラボンが伝えている⁴⁸⁾。

これらの伝承が、イトラーを除いてすべてが鉄器時代に入ってからのできごとを伝えるものであることは言うまでもない。そのイトラーは、『イリアス』ではヘレネに従っていた侍女として登場している⁴⁹⁾。またアテナイが大きく関わっているという特徴も見逃すことのできない事実である。そして実際、東部アルゴリスは鉄器時代に入ってからアテナイとは交易上深い関係を持っていたことが出土史料から明らかにさ

れたのである。

スウェーデン調査隊が発掘結果を報告した1938年⁵⁰⁾以降、アシーネ出土の陶器の研究がおこなわれ、現地製造の粗製土器に加えてラコニア、キクラデス諸島、アッティカから輸入した陶器が存在するという分析結果を得た⁵¹⁾。

またAEPの地表調査では南アルゴリスPG期に居住痕跡が認められるのはピガディア一箇所のみであり、ここから出土した一つの土器片の成分はアッティカPG土器と一致していること、また別の土器（クラテル）片はレフカンディのそれと同じであること、MG期になるとそれ以外の地にも人々の居住が認められようになるが、出土した土器片はアッティカやエウボイア（レフカンディ）の陶器ときわめて類似するものが多いこと、さらにLG期に入ってもアルゴス平野部とは異なりコリント陶器はほとんど存在せず、むしろアッティカ、キクラデス諸島からの輸入品が目立つようになり、アシーネの土器分布に近似していることがわかったのである⁵²⁾。

『イリアス』でディオメーデースの支配下に置かれていた東部アルゴリスは、このようにミケーネ時代の崩壊後しばらく無人に近い状態が続き、MG期からLG期にかけてはアルゴスよりもむしろアッティカ、エウボイア、キクラデス諸島と強いつながりを持つという特徴を有していた。すなわち、ジオメトリック期を通してアルゴス平野とは明らかに異なる文化圏に属していたと断定でき、この地域がアルゴス市の支配下になかったことは自明である⁵³⁾。それゆえ「ホメロス問題」の観点からこの状態を見ると、ホメロスは同時代の様子を描いてはいなかったのではないかという結論に達するかも知れない。しかしだからといって、ミケーネ時代のそれであると考えてるのは早計であろう。歴史時代に存在したトロイゼン近辺からは、ミケーネ時代居住地の確たる証拠がいまだに発見されていないからである⁵⁴⁾。さらに、ディオメーデースの船団がミケーネ時代のアルゴリスのものではないという明白な事実もある。

ミデアの城砦

アルゴス平野の東部、ナフプリオンの町から北の方向へ車で30分ほど行ったところにデンドラという小さな村がある。この村から見上げる海拔266mの丘の頂上近くにミケーネ時代の城砦が建てられていた。城壁は全長およそ1キロメートル、その一部は高さ7メートル、幅5メートルにもおよび、ティリンス同様巨石を使った典型的なキュクロペス式建築である。城壁の内側は約40,000平方メートルで、ミケーネの38,500平方メートルよりも広く、ティリンスの倍を誇る。ここからアルゴスの平野全域とアルゴス湾を一望でき、防御と監視という点において地理的条件は絶好であった。ここがストラボンやパウサニアスらの伝えるミデアと目されている遺跡である⁵⁵⁾。

【ミデアの城砦とアルゴス平野】



2001.8. 筆者撮影

麓のデンドラでは1920年代からミケーネ時代のトロス墓1基と岩室墓14基、またジオメトリック期の居住跡や墳墓があいついで発見されてきた⁵⁶⁾。トロス墓は盗掘に遭っていない希少な墓のひとつで、ここから金銀のカップ等が出土している。また岩室墓の一つからはホメロスが描くメーリオネースの“猪の牙のヘルメット”とまったく同じ兜を含むミケーネ時代の武具一式がほぼ完全な形で出土した⁵⁷⁾。

ミデア城壁内部の調査は1939年からパーソンによって始められ⁵⁸⁾、1985年以降はスウェーデン調査隊による本格的な発掘が進められている。Lower Terraceと呼ばれる北側緩斜面には土留めの擁壁が幾重にも構築されており、この区域が主たる居住域であった。

1985年から91年までおこなわれた城砦内の調査で出土した土器片は、屋根瓦を除いて16万点余にのぼる。詳細な年代決定の困難な粗製土器が3割近くあるが、大きく分類すれば青銅器時代の土器片が90%強、紀元後4世紀後半以降のローマ・ビザンツ時代のそれが9%余りを占めており、ジオメトリック期のはまったくなく、アルカイック期と古典期の土器片はわずか35点にすぎない⁵⁹⁾。出土した土器の分布と生活層の状況を見るかぎり、III C中期に崩壊したこの城砦は、後4世紀後半にいたるまでの1300年間、

完全に放棄されていたと判断せざるをえないであろう。

また図柄のついたミケーネ土器の分析から、MHIII期～LHI期にアイギナと密接な関係があったこと、LHIII期には他のアルゴリス地域同様鳥の絵が好まれたが、その一方でクレタや東地中海との強いコンタクトがあった形跡がうかがえること、また陶器の製作がこの地でおこなわれていた可能性のあることが指摘されている⁶⁰⁾。

ミデアはその壮大な城砦とトロス墓の存在ゆえに、ミケーネ時代にミケーネやティリンスとならぶ重要な王宮の一つであったことは疑いのない事実である。ところがミデアに関する神話は驚くほど少なく、ホメロスにもその名は登場していない。

ミデアの伝承と語源

ホメロスの記述をミデアと結びつけたのは、前5世紀の抒情詩人ピンダロスである。ホメロスによれば、ロドス船団を率いたトレポレモスは、父ヘラクレスの叔父リキュムニオスを殺害したために祖国を逃れてロドスへ渡った人物であった。このリキュムニオスの出身地をピンダロスはミデアとしたのである⁶¹⁾。

ピンダロスの祝勝歌に記された伝承は、しかし一般に広まることはなかったようである。ピンダロス以後の古典期とヘレニズム期にはミデアについて語る者はなく、ようやくストラボン、パウサニ阿斯、そしてアポドロスの時代になって復活した。ストラボンはこの神話に疑問を呈しつつミデアの遺跡を紹介するにとどめているが、リキュムニオスについてはティリンスの城壁を建てた7人のキュクロペスたちのひとりであり、リュキアからきたこと、そしてティリンスのアクロポリスはリキュムニオスに因んでリュキムナと呼ばれるにいたったと説明した⁶²⁾。一方、パウサニ阿斯はミデアをリキュムニオスの父エレクトリュオンの町だとしているが、アポドロスはリキュムニオスの所在を明らかにしないまま、彼をエレクトリュオンがプリュギアの女ミデアに生ませた庶子だとしている⁶³⁾。ミデアを地名ではなく人名と解釈したか、あるいはミデアをリキュムニオスの母であるとする異伝がどこかに残っていたために、アポドロスは後者を選んだものと思われる。

ミデアという語が二様に解されたのは、この語のつづりとアクセントが一本化されて伝わっていなかったためかも知れない。ストラボンはMídea (Μίδεια) とMidéa (Μιδέα) の2種類があることを伝えるが⁶⁴⁾、パウサニ阿斯ではMidéia (Μιδεία), Méedeia (Μήδεια), Midéa (Μιδέα), Mídeia (Μίδεια) など、さまざまなつづりのまま伝わっている⁶⁵⁾。

ミデアの語源については単に憶測の域を出ないのだが、二通り考えられる。一つはリキュムニオスがリュキア出身だという伝承が古くから存在したとすれば、ミデアは

アポドロスの言うようにブリュギアから来たのではないかという考え。ブリュギアのミダス (Midas) 王は、イオニア方言ではMidees (Μίδης) とつづられ、ミデアは「ミダスのもの、ミダスの土地」をも意味する。前8世紀の文化の発展(ギリシア＝ルネサンス)にとってブリュギアそれにリュキアが大きな影響をおよぼしたことが指摘されており⁶⁶⁾、ギリシア神話の多くが小アジアやフェニキアから流入したオリエント神話をもとに創作されたことを考慮すれば⁶⁷⁾、ミデアとリキュムニオスの語源はおのずと明らかとなろう。

もう一つの考えは「無, 無人」を意味するmeedeis (μηδείς) である。ミデアの城砦が前12世紀後半から無人の状態が続いていたことは先に述べた。しかし城壁はずっと残っており、ストラボンやパウサニアスの時代まで見る事ができたのである。人々はこの無人の廃墟を見て、やがてここを「無人の土地」(メーディア・ミデア) と呼ぶようになったとしても不思議はない。無論、前者の考えのほうが根拠のあることのように思えるものの、筆者は後者の憶測も捨てがたいものと考えている⁶⁸⁾。

いずれにせよミデアの城砦は人々に放棄され、まるで封印されたかのように、アルゴリスの神話体系からはずされていた。おそらくミケーネ時代につけられていた名前すらも忘れ去られていたに違いない。壮大さと地理的位置の重要性においてミケーネやティリスに引けをとることのなかったミデアを、もしもホメロスがミケーネ時代の様子を描いたとすれば、けっしてここを漏らすわけにはいかなかったはずである。

IV ミケーネ時代の記憶

本論ではペロポネソス半島西部とアルゴリス東部のミケーネ時代とその崩壊後の様子を見てきたが、『イリアス』の船団目録がミケーネ時代の国々を描いたものではないという結論を得ることができた。この結論は、近年の学界の趨勢を覆すものではなく、むしろそれをあらためて確認したにほかならない。

ホメロスの描く世界のほとんどが青銅器時代ではなく鉄器時代のそれであることは、レフカンディの遺跡⁶⁹⁾や東方との関わりが明らかになるにつれて、より確実なものとなってきた。だが、トロヤ戦争が史実であったとする暗黙の合意と、口承伝説の不変性に対する畏怖のような感覚、さらにホメロスが描写する青銅器時代の事物ゆえに、青銅器時代を完全には切り捨てることができないままにいる。

マーチャンドの発見は、このような学界動向を少なからず動揺させる可能性を秘めている。古典期のオルネアイは、それ以前に町があったという証拠をこれまで発見することができず、ドラティの遺跡にはミケーネ文明崩壊後に人が居住した形跡がない。

オルネアイと目される2箇所とも、ホメロスの時代には存在しなかったのである。古典期のオルネアイをホメロスが知っていたはずはなく、それゆえホメロスのオルネアイは400年前後人々が住むことのなかったドラティである蓋然性が高まり、ミケーネ時代からの記憶がホメロスの詩作に生きていたことの証左となるからである。

だがこの記憶をどう分析するかという問題こそ重要な点であることを忘れてはならない。ホメロスがミケーネ時代のものを描いたことは事実であるが、時代錯誤的な描写も数多く見られる⁷⁰⁾。これらの描写がミケーネ時代から脈々と続いてきた伝承に基づくものなのか、それともホメロスが偶さかに得た断片的な知識にすぎなかったのか、またもしそうであるとしたらホメロスはミケーネ時代の知識をいかにして得たのか。

ドラティの遺跡は、ともすればミケーネ時代との関わりを断ち切ろうとする傾向にあるホメロス研究に対して、さらに慎重におこなうべきであるという警鐘の役割を果たすかも知れない。それと同時に、ミケーネ時代の記憶が人々の間に亡霊のごとく浮遊していたことを、われわれに再認識させるきっかけとなるであろう。ドラティをオルネアイだと比定できるかどうかは、かかる意味できわめて重要なのである。

ここでは、ドラティを直接検証することなく、これまでに考古学調査によって得られた知見を整理するにとどめたが、つぎの機会にはアルゴリスのオルネアイとコリントスのオルネアイの2つがなぜ存在するにいたったか、またドラティが真にホメロスの言うオルネアイであるかどうかについての検討を試みるつもりである。

註

* 本論の執筆にあたっては、暗黒時代のアルゴリスを研究していた筆者に、鹿児島大学法文学部教授小田洋先生からオルネアイについての共同研究のご提案があり、マーチャンドの報告論文をお送りいただいたことがきっかけとなった。今夏先生に同行してギリシアへ渡航し、ドラティの発掘現場をマーチャンド女史に見せていただくことになっている。その結果は後日報告するつもりであるが、この誌上にて小田先生に心からの謝辞を述べる次第である。

- 1) Marchand, J. "A New Bronze Age Site in the Corinthia—The Orneai of Strabo and Homer?" *Hesp.* 71 (2002) 119-48.
- 2) 「船団目録」に関する学説史はKirk, G.S. *The Iliad: A Commentary Vol. I* (Cambridge 1985) 169-70を参照されたい。カークの後、Anderson, J.K. "The Geometric Catalogue of Ships" in *The Ages of Homer : A Tribute to Emily Townsend Vermule* ed. by Car, J.B. (Texas Univ. 1995) 181-88; Visser, Ed. *Homers Katalog der Schiffe* (Stuttgart 1997) らがこの問題を取り上げている。アンダーソンは「船団目録」はポイオティアの詩人が後代になってこの巻に挿入したと考え、フィッサーは詩句の語法や神話から研究を進めている(フィッサーの書は間際になって入手したため、筆者は詳細な検討をおこなっていない)。
- 3) *Il.* 2.569-77.

- 4) Paus. 2.25.4-6. 彼によれば、ダナオスの50人の娘たちに殺害されたアイギュプトスの50人の息子たちのうち、リュンケウスのみがヒュペルメストラによって助けられ、リュンケウスがリュルケイアに逃れた後、ヒュペルメストラがアルゴスのアクロポリス、ラリサから狼煙を上げて連絡を取りあったという。したがって、リュルケイアとラリサは相互に見えるところに位置していたはずである。
- 5) Strb. 8.376, 382; 13.587; Steph. Byz. s.v. 'Ορνεαί ή 'Ορνεάι. ストラボンは8.376で、「アルゴリス地方の村で、コリントとシキュオン両市の間に位置する町と同じ名」と2箇所のオルネアイがあることを示唆し、382ではオルネアイの場所をプリアポスの神域（シキュオンとコリントの間13.587）で「シキュオン平原のさらに上にあるアルゴス領の町」とする。
- 6) Thouk. 5.64-74; 6.7. Cf. Hdt. 8.73.
- 7) パウサニアスが述べる伝承と19世紀の旅行家たちの記録から、アルゴリス地方のカト＝ベレシ村がリュルケイア、そしてオルネアイはイムノ村南辺りであるとされ（Meyer, Er. R.E. s.v. Orneai）、カト＝ベレシの名もリルケアと改称されたが、20世紀後半の研究者たちの多くはこれに否定的である。Andrewes, A. *A Historical Commentary on Thucydides IV* (Oxford 1970) 107-110; Tomlinson, R.A. *Argos and the Argolid* (London 1972) 38-40; Pritchett, W.K. *Studies in Ancient Greek Topography III* (Berkeley 1980) 19-31. ホープシンプソンとレイズンビは1961年の夏にこの地のフィールドワークをおこなった際、イムノ村南約3キロの地点に古典期かヘレニズム期の監視塔と、その近辺から多数のミケーネ時代後期の土器片を発見したと報告しているが、これらの土器片についてはその後確認されていない。Hope Simpson, R. & Lazenby, J.F. *The Catalogue of the Ships in Homer's Iliad* (Oxford 1970) 66-67.
- 8) 時代背景に関するホメロス問題の学説史は、Crielaard, J.P. “Homer, History and Archaeology” in *Homeric Questions: Essays in Philology, Ancient History and Archaeology, including the Papers at a Conference organized by the Netherlands Institute at Athens* ed. by Crielaard, J.P (Athens 1995) 201-88に詳しい。この問題については、青銅器時代、ホメロスが詩作をおこなった前8世紀後半、定本を作ったとされるペイシストラトスの前6世紀半ばまでのどこを中心とするのかでさまざまな意見が出されているが、クリラールは前8世紀から前7世紀の様子がかなり反映されていたとする。
- 9) Strb. 8.339. ストラボンは第八巻の第三章（エリス）と第四章（メッセニア）の多くを、ホメロスの解釈にあてている（8.336-362）。そして本論にも引用している『イリアス』と『オデュッセイア』の該当部分から、中間に位置するトリピュリアのピュロスだと結論した。
- 10) *Il.* 11.670-761.
- 11) *Il.* 23.630-38.
- 12) Hainsworth, B. *The Iliad: A Commentary III* (Cambridge 1993) 296-98.
- 13) *Od.* 3.488=15.186.
- 14) *Od.* 15.296.
- 15) Kirk, G.S. *The Iliad: A Commentary II* (Cambridge 1990) 114-15; West, S. *A Commentary on Homer's Odyssey I* (Oxford 1988) 191.
- 16) *Il.* 9.149-53=9.291-95.
- 17) ペライについてホメロスは、「ピュロスを流れるアルペイオス河神の家柄で、トロヤ戦争に参加した双子のクレトンとオルシロコス兄弟の父ディオクレースが住んでいるところ（*Il.*5.542ff.）」と説明しているが、兄弟がどの船団に属していたかを明らかにしていない。本文に述べたように、テレマコスのスパルタまでの行程を考えると、ペライはカラマタあたりに位置するはずなのでコリント湾岸だと主張する研究者はいないが、ホメロスが地理をどう理解していたかによってはコリント湾西部という可能性も捨てられないのではないかと筆者は考えている。

- 18) *Il.* 7.133-56.
- 19) Ventris, M. & Chadwick, J. *Documents in Mycenaean Greek* (Cambridge 2nd ed. 1973) 303-04.
Chadwick, J. *The Mycenaean World* (Cambridge 1976) 42-43.
- 20) Chadwick (1976) 45
- 21) Shelmerdine, C.W. "The Pylos Ma Tablets Reconsidered" *AJA* 77 (1973) 261-275.
- 22) Ventris & Chadwick (1973) 193-94. An 文書661番13行
- 23) Strb. 8.349.
- 24) Strb. 8.346; Paus. 5.6.3. Hope Simpson & Lazenby (1970) 83; Kirk (1985) 215.
- 25) Hope Simpson, R. "Identifying a Mycenaean State" *BSA* 52 (1957) 231-59 esp. 242-43.カラマタの城砦
(第四回十字軍遠征中にフランスのヴィラールドゥアンが13世紀初頭に建てたもの) から北東に500メー
トルほど行った小高い丘の頂上付近(ネゾン川の東)から、ミケーネ時代の墓と陶器、PGと思われる土
器片が発見された。また、彼はラコニアとメッセニアとを結ぶ古代の車道を、ヴィラールドゥアン城近く
で発見したことを報告している (*idem.* "The Seven Cities offered by Agamemnon to Achilles" *BSA*
61 (1966) 113-31)。
- 26) Ventris & Chadwick (1973) 147-150.
- 27) McDonald, W.A. "Excavations at Nichoria in Messinia: 1969-71" *Hesp.* 41 (1972) 218-73, pls. 38-52;
McDonald, W.A. et.al. "Excavations at Nichoria in Messenia: 1972-1973" *Hesp.* 44 (1975) 69-141, pls.
17-32.
- 28) Davis, J.L. ed. *Sandy Pylos —An Archaeological History from Nestor to Navarino—* (Austin 1998).
- 29) d'A. Desborough, V.R. *The Last Mycenaean and Their Successors —An Archaeological Survey c.
1200-c.1000B.C.—* (Oxford 1964) 93-94.
- 30) McDonald (1975) 140-41.
- 31) Spencer, N. "Nichoria: An Early Iron Age Village in Messenia" in Davis (1998) 167-170.
- 32) Hdt. 5.65; Paus. 2.18.7-8.
- 33) Chadwick (1976) 40-41.
- 34) Foley, A. *The Argolid 800-600 B.C. —An Archaeological Survey—* (Göteborg 1988) 23-25.
- 35) Jameson, M.H., Runnels, C.N. & van Andel, T.H. *A Greek Countryside —The Southern Argolid from
Prehistory to the Present Day—* (Stanford 1994); Runnels, C.N., Pullen, D.J. & Langdon, S. eds.
*Artifact & Assemblage —The Finds from a Regional Survey of the Southern Argolid, Greece— Vol.
1* (Stanford 1995).
- 36) Foley (1988) 23-25.
- 37) Kilian, K. "Mycenaeanans Up To Date, Trends and Changes in Recent Research" in *Problems in
Greek Prehistory —Presented at the Centenary Conference of the British School of Archaeology at
Athens, Manchester April 1986—* eds. by French, E.B. & Wardle, K.A. (Bristol 1988) 135.
- 38) AEPの調査によれば、ピガディアからの土器出土状況はIII C期とSM期はなし、PG期の陶器はスキフォ
ス、クラテル、カップなどかなりの数が出土、しかしEG期の土器片はわずかに4つのみとなってお
り、この地が長期間にわたって居住地となっていたかどうかは疑問である。
- 39) Foley (1988) 25; 254=Map3; 261=Table 1. 東部アルゴリスと中央平野の境にあるカザルマでもPG期
の土器片が発見されているが、カザルマではこの後古典期まで居住の形跡がない。
- 40) Foley (1988) 28.
- 41) Jameson, M.H., Runnels, C.N. & van Andel, T.H. (1994) 58-59 n.1.

- 42) Paus. 2.30.9; Strb. 8.374.
- 43) Strb. 8.374.
- 44) Hdt. 7.99.
- 45) Hdt. 5.82-88; Paus.2.30.4.ここに奉安されたグミアとアウクセシア二柱の女神は、トロイゼンとラコニアでも信仰されていたという。See How, W.W. & Wells, J. *A Commentary on Herodotus II* (Oxford 1911, rep. 1980) 46.
- 46) Hdt. 8.72. ストラボンは、エピダウロスはエピカロスとも呼ばれ、ヘルミオネと同じくカリア人が領有していたが、ヘラクレイダイ(ドーリス人)の帰還に際してアッティカ東部のテトラポリス出のイオニア人がこれに合流してエピダウロス市を先住民(カリア人)とともに建設したという。Strb. 8.374.
- 47) *FGH* 3 (Pherekydes) Γ19.
- 48) Strb. 8.373-74. カラウレイア同盟の年代については、前700年前後 (Jeffery, L.H. *Archaic Greece — The City-States c.700-500 B.C.—* (London 1976) 160-51), 前7世紀半ば (Kelly, Th. *A History of Argos to 500 B.C.* (Minneapolis 1976) 74), あるいはヘレニズム時代 (Hall, J.M. “How Argive Was the ‘Argive’ Heraion? —The Political and Cultic Geography at the Argive Plain, 900-400 B.C.—” *AJA* 99, (1995) 584-85) と、同盟結成の年代についてはさまざまな意見が出されている。
- 49) *Il.* 3.144. テセウスについての言及は『イリアス』で1箇所(2.265)と『オデュッセイア』で2箇所(11.332,631)だが、その出自についてはまったく触れられていない。ここに登場するアイトラー(アイトラー)はピッテウスの娘という設定になっているので、テセウスの母であることは間違いない。しかし、王妃につき従う下女たちというシーンはホメロスの叙事詩で繰り返し詠われているにもかかわらず、この箇所以外では一度も名前を出されていないことから、カークは後代の挿入であろうとしている。Kirk (1985) 282. カークの推論が正しければ、アルゴリス東部の神話はアイトラーを含めたすべての伝承が鉄器時代に入ってからのできごと、あるいは創作ということになる。
- 50) Frödin, O. & Persson, A. *ASINE —Results of the Swedish Excavations 1922-1930—* (Stockholm 1938).
- 51) Wells, B. *ASINE II —Results of the Excavations East of the Acropolis 1970-1974—* Fasc.4 Part2 (Stockholm 1983); Coldstream, J.N. *Geometric Greece* (London 1977) 152; Foley (1988) 59-61. アシーネからは、アッティカのほか、キクラデス諸島やロドスからの輸入陶器も出土している。Courbin, P. *La Céramique Géométrique de l’Argolide* (Paris 1966) Texte 553-54.
- 52) Langdon, S. “The Pottery of the Early Iron Age and Geometric Period” in Runnels, C.N., Pullen, D. J. & Langdon, S. (1995) 57-73.
- 53) 前8世紀におけるアルゴス平野については、発掘調査(アルゴスの人口増加・発展とアシーネの破壊)およびアルゴスによるアシーネ攻略やフェイドンの伝承から、アルゴスが前8世紀のうちにアルゴス平野全域を支配し、その後勢力を半島全域に広げたと解釈されたこともあったが、ホールやストレームはアルゴス平野をも支配下においてなかったとする論文を発表し、現在ではアルゴスの覇権に対する慎重論が主流となっている。Kelly (1976); Hall (1995); Ström, I. “The Early Sanctuary of the Argive Heraion and its External Relations (8th—Early 6th Cent. B.C.) —The Greek Geometric Bronzes—” *PDIA* I (1995) 36-127. 拙稿「アルゴリスにおけるポリス成立をめぐる —学界の動向と今後の展望—」『九州産業大学国際文化学部紀要』22 (2002) 31-46; 古山正人「Herodotos1.82とPausanias2.24.7 —ヒュシアイとテュレアティスの帰属をめぐる—」『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』34 (2003) 173-194.
- 55) Strb. 8.373; Paus. 2.25.9. Persson, A.W. *The Royal Tombs at Dendra Near Midea* (Lund 1931) 3-7.

- 56) Persson (1931) 8-42, 73-107; *idem*. *New Tombs at Dendra near Midea* (1942) 17-101.
- 57) Åström, P. "Pottery from Dendra Tombas 12 and 13" *Arch. Delt.* 16 (1960) 94; Verdelis, N. "ΜΙΔΕΑ (ΔΕΝΔΡΑ)" *Arch. Delt.* 16 (1960) 93-94.
- 58) Persson (1942) 3-12.
- 59) Walberg, G. *Excavations on the Acropolis of Midea —Results of the Greek-Swedish Excavations—* (Stockholm 1998) 18-86.
- 60) McMullen Fisher, S. "The Mycenaean Pictorial Pottery" in Walberg (1998) 100-09; Walberg, G. "The Middle Helladic Pottery" in Walberg (1998) 96-99.
- 61) *Il.* 2. 662-63; Pind. *Olymp.* 7. 27-31; 10. 64-65. Paus. 3.15.4. ホメロスは「父の母(アルクメーネー)方の叔父」, パウサニアスも「アルクメーネーの兄弟」とリキュムニオスの出自をはっきりと記していないのに対し, ピンダロスは「アルクメーネーの庶子の兄弟」と断定している。
- 62) Strb. 14.653-54; 8.373.
- 63) Paus. 2.25.9; Apollod. 2.4.5.
- 64) Strb. 8.373. ストラボンが、アルゴリスのミデアは第二音節にアクセントを置く *Μιδεα*, ボイオティア地方にあるミデア (*Il.* 2. 507) は *Μιδεα* だとする。
- 65) *Μιδεα* (2.16.2), *Μηδεα* (2.25.9), *Μιδεα* (6.20.7), *Μιδεα* (8.27.1) in *TLG*. Persson (1931) 4. パーソンは Pape, W. *Wörterbuch der griechen Eigennamen* (筆者未見) から, さらに *Μηδεα* と *Μιδεα* のつづり字もあったとする。
- 66) この2つのほか, コルキスの王女メディア, ペルシアの大国メディア(王女メディアから派生したとの伝承がある Paus. 2.3.8) を語源とする可能性もある。
- 67) DeVries, K. "Greeks and Phrygians in the Early Iron Age" in *From Athens to Gordion: The Papers of a Memorial Symposium for Rodney S. Young* DeVries, K. ed. (Philadelphia 1980) 33-49; Tomlinson, R.A. "Chronology of the Perachora *Hestiatorion* and its Significance" in *SYMPOTICA-A symposium on the Symposium* Murray, O. ed. (Oxford 1990) 95-101.
- 68) Mondì, R. "Greek and Near Eastern Mythology" Edmonds, L. ed. *Approaches to Greek Myth* (Baltimore 1990) 146f.; Burkert, W. *The Orientalizing Revolution —Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age—* (Harvard 1992) tr. by Pinder, M.E. & Burkert W.; Penglase Ch. *Greek Myths and Mesopotamia —Parallels and Influence in the Homeric Hymns and Hesiod—* (NY 1994).
- 69) Popham, Sackett & Themelis eds. *LEFKANDI • I —The Iron Age Settlement—, II —The Protogeometric Building at Toumba—, III —The Early Iron Age Cemetery at Toumba—* (Oxford 1980-96).
- 70) 時代錯誤的事物については, Powell, B.B. *Homer and the Origin of the Greek Alphabet* (Cambridge 1991) 187-220 で詳しく分析されている。